

## 21. 滋賀県下の庄内式土器

### —畿内より搬入された 甕形土器の分布—

#### はじめに

庄内式土器は古式土師器の一型式であるが、狭義には、その中でも特徴的な甕を庄内式土器といい、また庄内式甕とも呼ばれる。本文中で庄内式土器としたのは、この狭義の意である。

この庄内式土器は、いわゆる「河内系土器」と呼ばれるものであり、胎土中に金雲母片・黒雲母片を多く含み、色調は暗褐色から黒褐色に近くなる。この点において他の土器と明らかに識別され、これが庄内式土器の最も顕著な特徴の一つになっている。また、製作技法および形態的にも特徴があり、前述の胎土・色調と相まって、庄内式土器の諸特徴を構成している。

製作技法の特徴は、体部内面のへら削り技法と体部外面の細かい叩き目（時には粗いハケ目と見誤ることがある）とハケ目調整である。内面は、へら削り技法によって器壁を極めて薄く仕上げ、外面の叩き目は、次第にハケ目によって消されていくが、なお肩部に叩き目を残すことが多い。

形態的特徴は、くの字状に外反する口縁部を持ち、口縁端部を小さくつまみあげる。この口縁端部は鋭く尖り気味である。頸部内面は、内面へら削り技法によって鋭い稜をもつ。体部は丸味を帯び、最大腹径はほぼ中位にあるものから、中位からやや上に位置するものがある。底部は尖り底に近いものから丸底まである。

以上の諸特徴が庄内式土器を構成しているのであるが、中に、形態的には庄内式土器の特徴を示すが、胎土、色調が異なるものがある。これは、庄内式土器の影響を受けて成立した在地の土器と考えられる。このような土器も庄内式土器に含めておきたい。

この庄内式土器は畿内各地に分布し、西は北九州にも存在することが知られている。畿内の東方で、明らかに庄内式土器を認められるのは、この近江地方である。ここでは、近江における庄内式土器の分布を検討してみたい。

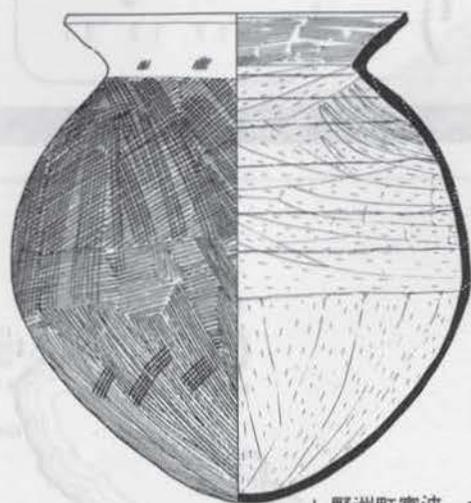
#### 県下の庄内式土器

ここ数年来、県下にも庄内式土器の出土例が増加している。そこで、その分布状況と特徴を見てみよう。

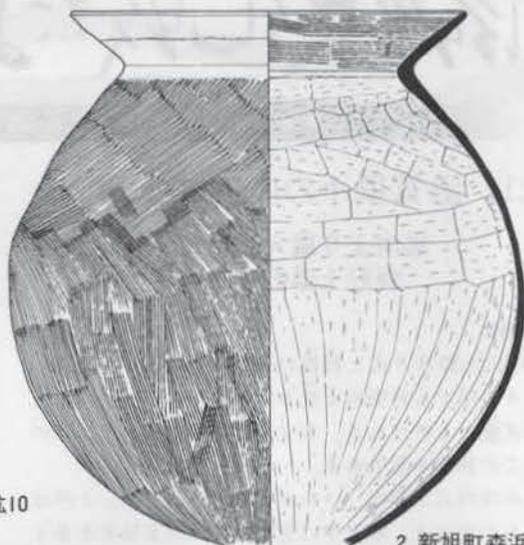


第1図 庄内式土器の分布

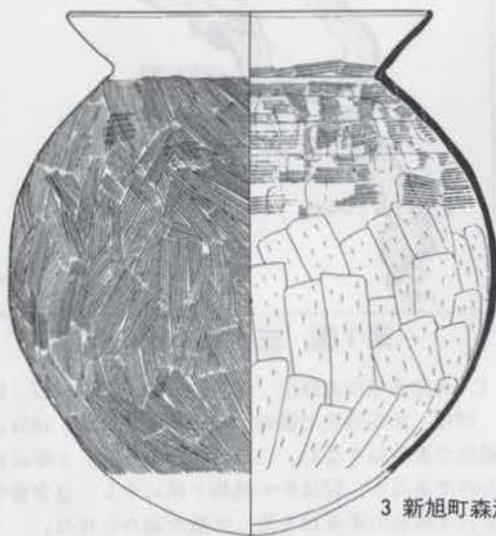
1. 大津市坂口遺跡①（報告書P16、第9図17、18）  
17は、淡茶褐色で雲母の微細片を含むが、18は、暗褐色で黒雲母を含む。18は「河内系土器」と呼ばれるものであるが、17はやや様相を異にする。包含層中にも17と同質の叩き目を施した甕が認められた。
2. 大津市滋賀里遺跡②（報告書図版編 第54図C59、64 第55図C92 第56図C129、131、132）  
いずれも雲母片を含むが、C59、64、92、129は暗褐色であり、C131、132は褐色である。
3. 大津市北大津遺跡③  
胎土に雲母片を含み、色調は暗褐色である。
4. 大津市榎木原遺跡④（報告書 図版15、37）  
胎土、色調は報告書では不明であるが、庄内式土器の可能性はある。
5. 草津市観音堂遺跡⑤  
観音堂廃寺跡の南限を画する溝から出土した古式土師器の中に数点が含まれる。いずれも雲母片を含み、色調は茶褐色である。
6. 野洲町富波遺跡⑥（第3図 1）



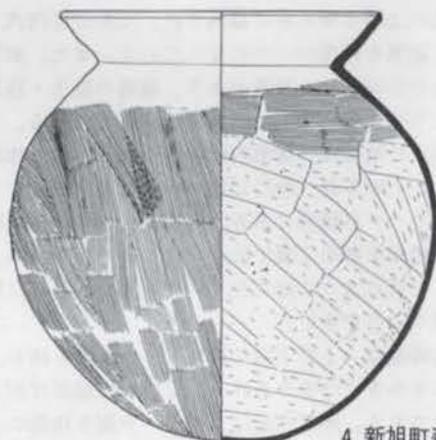
1 野洲町富波 土壇10



2 新旭町森浜



3 新旭町森浜



4 新旭町森浜

0 10 20cm

## 第2図 滋賀県下出土の庄内式土器

富波遺跡土壇10から良好な資料が出土している。くの字状に外反する口縁部の中位はわずかに肥厚し、端部を小さくつまみあげる。丸味をおびた体部の最大径はほぼ中位に位置し、尖り気味の丸底である。

口縁部は横ナデするが、内面にハケ目、外面に叩き目が部分的に残る。体部外面は叩き目のあとハケ目を縦方向に施す。叩き目の方向は、上位が右上り、中位はほぼ水平に近くなり、下半は右上りである。上半のハケ目は粗く鋭いが、下半のハケ目は太くて浅い。上半と下半のハケ目の原体は異なると思われる。体部内

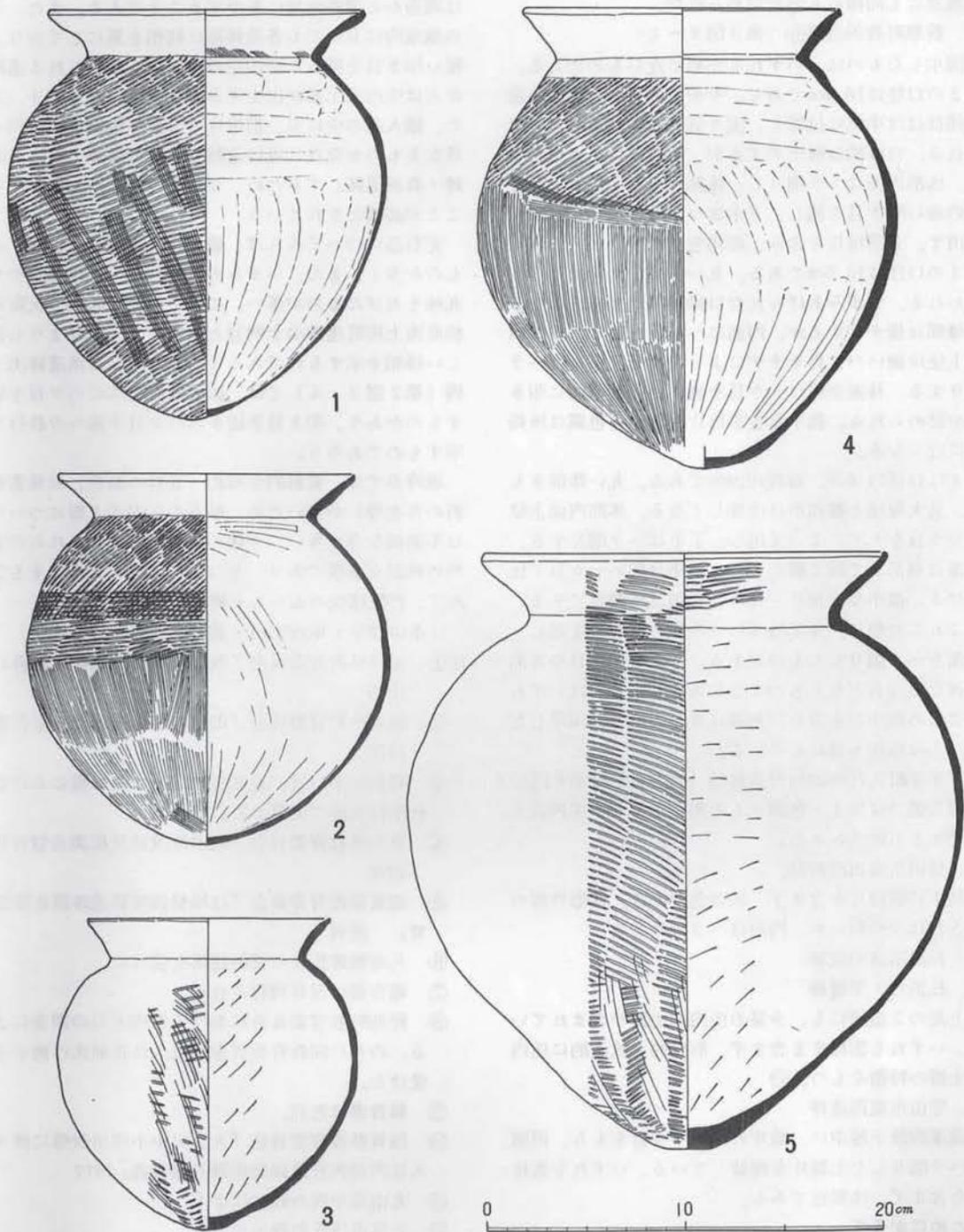
面上半は横方向、下半は下から上へ粗くへら削りするが、体部内外面に粘土の継ぎ目が残る。胎土に黒雲母片を含み、色調は暗褐色である。口径は15.5cm、器高は23.7cmである。

### 7. 野洲町五之里遺跡⑦

体部外面に羽状の叩き目を施したものがある。雲母の微細片を含み、色調は淡茶褐色である。

### 8. 野洲町和田遺跡⑧

和田遺跡大溝第3層中に寝胴部片が含まれていた。色調は暗褐色であり、雲母片を含む。また、遺跡内の



第3図 1~3 大阪府松原市上田町遺跡 中層出土  
 (原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」より)  
 4・5 藤原宮内裏東外郭地域 SD527出土  
 (安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」考古学雑誌60-2より)

別地点にも同様のものが認められた。

#### 9. 新旭町森浜遺跡⑨(第3図2~4)

図示したものは、いずれも完形に近いものである。

2の口径は18.8cmである。やや肩の張った体部の最大径はほぼ中位に位置し、尖り気味の丸底をもつと思われる。口縁部は横ナデするが、内面にはハケ目が残る。体部内面はへら削りし、体部外面上半は右すり方向の細い叩き目を施し、下半はハケ目によって叩き目を消す。金雲母片を含み、暗褐色である。

3の口径は16.5cmである。丸い体部に丸底をもつと思われる。つまみあげられた口縁端部は丸味をおびる。口縁部は横ナデするが、内面にハケ目を残す。体部内面上位は細いハケ目をナデによって消し、下半はへら削りする。外面全体にハケ目を施すが、部分的に叩き目が認められる。微小な金雲母片を含み、色調は灰褐色に近くなる。

4は口径14.6cm、器高19.9cmである。丸い体部をもち、最大腹径と器高がほぼ等しくなる。体部内面上位はハケ目をナデによって消し、下半はへら削りする。外面は肩部まで強く横ナデし、下半は細いハケ目で仕上げられる。微小な雲母片を含み、色調は灰褐色である。

これらの他に、体部外面にやや粗い叩き目を施し、内面をへら削りしたものがある。また、叩き目の方向が異なる(右下り)ものなどがある。これらはいずれも雲母の微小片を含み、色調は淡茶褐色で、図示したものとは様相を異にしている。

#### 10. 米原町入江内湖西野遺跡⑩(報告書P12第8図37)

報告書では胎土・色調とも不明であるが、庄内式土器である可能性がある。

#### 11. 長浜市高田遺跡⑪

胎土に雲母片を含まず、淡褐色である。体部外面の叩き目はやや粗いが、内面はへら削りする。

#### 12. 長浜市宮司遺跡

#### 13. 長浜市十里遺跡

上記の2遺跡にも、少量の庄内式土器が含まれている。いずれも雲母片を含まず、形態的・技法的に庄内式土器の特徴をもつ。⑫

#### 14. 守山市服部遺跡

環濠内最下層中に、数片の細い叩き目をもち、内面をへら削りした土器片を確認している。いずれも雲母片を含まず、淡褐色である。

#### まとめにかえて

以上のように、県下の庄内式土器を観察してきた。その分布はほぼ県内全域(湖東地域においても近い将来確認されるであろう。)に認められるが、その量は、他の土器と比較して微々たるものである。

分布の中でも気がつくのは、技術的な搬入品が湖北地域(長浜周辺)に多く、搬入品としての庄内式土器

は湖南から湖西地域に集中することである。また、その地域内においても各遺跡毎に様相を異にしており、粗い叩き目を施した畿内型の甕が多く認められる遺跡からは庄内式土器が出土する率が高いといえよう。また、搬入品の中にも、雲母片の含有・色調等に様相の異なるものが存在(坂口遺跡・滋賀里遺跡・五之里遺跡・森浜遺跡)するため、これらの製作地を検討することが必要とされている。

完形品についてみれば、最大腹径が中位に位置するものが多く、また、つまみあげられた口縁端部がやや丸味をおびたものが多い。このような傾向は、大阪府松原市上田町遺跡出土例⑬と比較して、それよりも新しい様相を示すものであろう。とくに、森浜遺跡出土例(第2図3・4)では、体部外面全体にハケ目を施すものがあり、叩き目手法からハケ目手法への移行を示すものであろう。

現時点では、資料的な制約(資料の偏在、未発表資料の存在等)が強いため、県下の庄内式土器については不明確な点が多い。今後の課題として、それらの資料の検討が必要であり、かつまた、庄内式土器をも含めて、器種構成の面からも検討すべきであろう。

(本田修平・堀内宏司・奥野宗寛・折井千枝子)

注① 滋賀県教育委員会『坂口遺跡発掘調査報告書』

1975

② 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』

1976

③ 昭和52年11月、近江風土記の丘資料館における秋季特別展で実見した。

④ 滋賀県教育委員会『禮木原遺跡発掘調査報告Ⅱ』

1976

⑤ 滋賀県教育委員会『ほ場整備関係遺跡調査報告Ⅵ』

近刊

⑥ 久米雅雄氏より資料提供を受けた。

⑦ 報告書は近日刊行される。

⑧ 野洲町教育委員会における堀内宏司の調査による。のちに同教育委員会囑託入江正則氏の教示を受けた。

⑨ 報告書は近刊。

⑩ 滋賀県教育委員会『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』

1977

⑪ 丸山竜平氏の教示による。

⑫ 石原道洋氏の教示による。

⑬ 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」(『大阪府立島上高校研究紀要3』昭和43年)